維新の記憶に残る「最後の戦い」

増山雄三

信州長野県のかつての中山道沿いに、「魁塚」という石碑が建っているが、それは「相楽塚」とも呼ばれていて、明治維新に際して官軍側についた、草莽の志士集団だった「赤報隊」を率いた、「相楽総三（一八三九～六八）」らが処刑された場所である。

相楽の本名は、小島四郎将満といい江戸の郷士だったが、文武両道で、二十才のころから私塾を開いて歌学や国学それに兵学も教えて、二百人を超える門弟がいたとされる人物だが、彼の死後、同志らによる名誉回復の動きが起き、魁塚が建てられたのである。

この赤報隊は、倒幕のための官軍先鋒隊の一つとして、薩摩の西郷隆盛や公家の岩倉具視の支援を得て結成されたものだが、慶応四年（一八六八年）一月の鳥羽伏見の戦いで敗

れ退却した幕府軍の軍勢を、西郷や岩倉らは東征で更に決着をつけようと考えていた。

そこで、西郷と岩倉らの新政府側は、勤皇倒幕を志す郷士を集め、同年一月八日、近江で相楽を一番隊長とする**赤報隊**を決起させ、「租税を軽くすれば、民衆は朝廷のありがたさに感激して、旧幕府を倒す東征の助力になる」と、年貢半減を新政府に建白させた。

その後、赤報隊は軍資金や小銃は薩摩藩から提供を受け、「**年貢半減**」を布告して東山道を進み、反幕府の民意を煽り、三百人以上の農民を次々と味方につけたが、実は、正式な「**官軍之御印**」は貰えなかったし、年貢半減も新政府の確固たる方針ではなかった。

というのは、新政府は資金の提供者である商人からの圧力もあり、年貢半減を撤回せざるを得なくなり、赤報隊に京都への帰還を命じるも、相楽はそれに従わずに倒幕を急ぎ、現在の群馬と長野の県境である、旧政府軍が北へ逃れる際の要衝となる「**碓氷峠**」の攻略

をめざし、二月に下諏訪に入ったものの、もはや、新政府にとって赤報隊は、命令違反を起こした「偽官軍」だった。

そこで新政府は、「勅命と偽って官軍先鋒隊を名乗り、勝手に進軍した」といい、赤報隊に偽官軍の汚名を着せ、信濃国下諏訪で慶応四年（一八六八年）三月三日、一番隊長の相楽総三ほか幹部八人を断首してしまった。

無謀とも思えるような赤報隊の碓氷峠への進軍は、それが正しいという純粋さと、最終的には、新政府から理解してもらえるという信念があっての事だろうが、処刑の際、相楽総三は一言も発さず、身動きせずにただその時を待つのみだったという。

先述のように、彼の死から暫くたった明治三年（一八七〇年）に「魁塚」が建てられ、大正期には慰霊祭の「相楽祭」が行はれ、昭和の初期には、相楽に正五位が追贈されて名誉が回復され、毎年、命日に近い四月の第一日曜日には、有志による「相楽会」が魁塚で

相楽祭を執り行はれ、隊士の子孫や各地の歴史ファンも参列し、大いに賑わうという。

だが、令和初となる今年は、高齢化も進み会員数も減り、新型コロナの感染拡大の影響もあって、役員十数人だけで実施されたというが、それでも、志半ばで倒れた相楽らを慰めたいという思いは、今も継承されている。

一方、赤報隊が散った七ヶ月後の明治元年（一八六八年）十月二十一日、箱館北方の鷲の木（現北海道森町）に、旧幕府軍の一部が蝦夷と呼ばれた北海道に渡り、旧幕府海軍副総裁をしていた「榎本武揚」を総裁に選出して、蝦夷地開拓とロシアに備える北方警備を行う目的で、「蝦夷共和国」を設立した。

といえば聞こえは良いが、実は、徳川が四百万石から静岡藩七十万石に減俸され、幕臣の八割がたが失職してしまったからで、当時の箱館は国際港で貿易ができたし、地下資源が豊富だった事に目をつけたのである。

この共和国政権の運営や戦闘は、国際法の

ルールとは何かという事を、常に認識しながら進められていたが、諸外国は当初、蝦夷政権を「事実上の政権」とみなして中立を守っていたが、早々にこの共和国は、日本政府に対する反乱軍という扱いに変えていった。

榎本が率いた旧幕府艦隊の「開陽丸」は、国内では無敵の最新鋭艦で、新政府軍側の海軍力を圧倒していたが、江戸城が無血開城された後、若年寄の永井尚志ら二千人余りの徳川脱藩の家臣を、分乗させ江戸を逃れた。

そして、複数の軍艦が寄港した途中の仙台で、東北戦争に敗れた将兵も収容したが、その中に、歩兵奉行並の大鳥圭介や、新選組副長の土方歳三、それに、桑名藩主で京都所司代を務めた松平定敬などもいた。

そして、土方歳三の部隊が、津軽海峡に臨む、幕末の西洋式城郭だった「五稜郭」を守っていた、新政府の守備兵を追い払い、さらに、松前藩の福山城を陥落させた。

序でながら、この五稜郭は中央に周囲を威

圧する天守閣はなく、箱館奉行所の簡素な建物があるだけで、いま隣接する五稜郭タワーから見下ろすと、石垣と堀が「星形」だと分り、今は復元され内部も見る事ができる。

ところで、この共和国の首脳人事は、元老中や藩主もいたものの、米合衆国に倣い士官以上による選挙で決め、箱館には諸外国の領事もいて、外交力が必要なので、それには、オランダに留学した経験を持ち、国際法に通じていた「榎本」が適任だった。

戊辰戦争は、もはや攘夷派と開国派の争いではなくなっていて、むしろ、列強による植民地化に抵抗しうる統一政府樹立という一点で、旧幕府勢と新政府勢の目標は一致していたので、この時期、開国は不可避だった。

それでも、徳川排除の是非を巡っての内戦は続発していて、双方が大義を掲げ、列強の監視下で、国際法を参照しながら争い、その最後が「箱館・五稜郭」の戦いだった。

この戦いで、蝦夷共和国の榎本軍は、旗艦

の開陽丸が悪天候で沈没して、戦力が弱体化していたので、観念した榎本は、座右の書だった国際法の「**万国海律全書**」を、新政府軍参謀だった「**黒田清隆**」に渡し、降伏した。

榎本武揚は、意外にも明治になって新政府の要職を務め、それまでとは全く違う生き方をしたが、それは、自分の能力を国のため、人々のために使おうと考えたからで、名前からするといささか勇ましい感じがするが、実際の人柄はざっくばらんで、江戸っ子だったので、ベランメエ調で話していたという。

そして、謡曲や小唄それに端唄や長唄も、非常にうまく玄人はだしで、試しに吹き込んだレコードを、会社の人が当時の尾上菊五郎へ持って行くと、「**榎本子爵なのか．．．**」と驚かれ、その後二人は仲良くなったという。

この話は、いま「**開陽丸子孫の会**」の会長を務める、八十二才になった曾孫の「**榎本隆充**」さんの思いで話である。

令和二年六月